

展示リニューアルに関するワークショップ
in 檀原市昆虫館

【 報 告 書 】



2009年12月21日（月） 檀原市にて

主催：NPO 法人西日本自然史系博物館ネットワーク
檀原市昆虫館

協力：株式会社ムラヤマ

はじめに

今回のワークショップは、展示更新を題材として開催したもので、おそらく全国的にもはじめての例ではないかと思えます。その理由は、展示更新の機会自体がほとんど無いのと、スケジュールに追われて自ら開催する余裕がないことが大きな要因でしょう。さらに、展示の制作途中で外部の人々に茶々を入れられることは不愉快なことであるという意見もあるかもしれません。それにも関わらず、今回榎原市昆虫館の皆さんは、『狙のコイ』となってくださり、参加者の皆さんの意見を十二分に聞いて受け答え下さり、大変感謝しております。この場を借りて、改めてお礼申し上げます。

さて、学芸員は多けれど、常設の展示更新を2回も3回も経験している学芸員は皆無だと思えます。通常は、1回きりの経験になるのではないのでしょうか。そう考えると、展示会社の方を除けば、みな経験不足ということになります。ですが、博物館にとってはメインイベントであり、将来の博物館像を決定づけるものなのです。

この状況は、防災に似ています。川の洪水や大震災に遭遇する機会は、自治体職員を長くしていても、そうそう遭遇する機会はありますが、災害がひとたび起これば主役となって、対処しなければなりません。対処にあたっては、被災者の声、地域の声、専門家の声、業者さんの声を聞いて、相反する価値観、多様な価値観を、災害対応の経験が少ない職員が統合的に処理することになります。なかなかの無理難題なのです。このため、防災に関わる職員は、災害が発生すると、担当地域外の職員も応援にかけつけたり、他の自治体や海外で災害が発生したときには職員を派遣して経験を積んだり、逆に経験を提供するわけです。日頃からのリアルな経験、実務者としての経験がものを言うのは、想像に難くないでしょう。

今回の企画を思いついたのは、実は兵庫県で起こった2つの河川災害とも関係します。2009年7月に兵庫県佐用町を流れる千種川が氾濫し、多くの方が犠牲になりました。その少し前、2004年兵庫県円山川を襲った台風23号も、甚大な被害を豊岡市にもたらしました。私は、この2つの災害からの復興計画における環境対策に深く関わり、非常時の経験の重要性を痛感しました。その際に博物館の展示更新が類似することに気付き、密かに機会を伺っていたところ、榎原市昆虫館の木村さんと日比さんからリニューアルに関する相談を受けて、ちゃっかりと逆提案した訳です。貴重な機会を博物館関係者で共有し、逆にリニューアルを経験した学芸員が情報を提供し、そしてリニューアルにあたって気付いた点を記録に残すことが大切だと思い、この企画を立案しました。防災に関する記録や経験は、国土交通省や県庁の中央本部が集約して、情報共有や発信がなされているのですが、残念ながら自然史系の博物館に、これに相当する中核機関はありません。博物館学の発展や博物館力の向上を考えれば、こうした中核的機関は不可欠です。微力ながらも、こうした博物館ネットワークを活用して、展示に関する知見や知恵の共有を進めていければと考えています。榎原市昆虫館に限らず、展示リニューアルや新設の際にはぜひ、自ら『狙のコイ』になって下さる館がこれを機会に出現することを期待します。そのことが博物館力を高めるのだと思います。

今回の企画では、主に、全体的な内容やコンセプト部分が議論の中心となりました。展示室内での休憩スペースのとりかた、導入部分の重要性、学芸員と来館者の距離、展示内容への独自性やこれまでの実績の反映や地域の固有性などの意見がありました。これは人文系・科学系を問わず重要な観点であり、実体験に基づいた貴重な意見が多数あったように思います。一方、『知識の一方向的な提供ではなく、疑問の提示とその解決を促すこと』、『モノだけでなく見えない仕組みを見せること』、『ハンズオンに活用する小道具のあり方』といった部分は、科学系にオリジナルなものだったかと思えます。しかし、この部分については、展示リニューアル案でも十分に触れられていなかったため、配慮が必要な部分であると同時に、各館での常設展示でも省みる部分は多いかと思えます。榎原市昆虫館のリニューアル展示へのコメントというだけでなく、各参加者がこうした指摘事項を持ち帰り、常設展の不足分を小物で補うことや、インタープリテーションや標本の追加といった方法で補えるはずで、そして、これらの改善点が再び共有できれば、博物館の展示力も向上するのではないのでしょうか。

今回の議論では、全体的な内容が多く、個々の技術論に十分な時間を割くことはできませんでした。参加された学芸員にとっては、不満足な部分があったかもしれません。具体的には、展示内容と趣旨に基づいたタイトルやサブタイトルのつけかた、テーマの選定、キャッチコピーづくり、素材の妥当性、周辺展示との関連性、ハンズオンものとの対応、効果的なイラスト配置、強調部分の位置づけ、問いかけ内容と理解度などでしょうか。これらは、おそらく丸一日かけて、一つの展示テーマだけを対象として、じっくり議論するやりかたで進めたほうが効果的だと感じました。このワークショップを開催する前は、展示パネルの説明方法や内容にもっと議論が集中するかと思っていましたが、この点は意外でした。その意味では、参加者の皆さんが場を読んで下さったのかもしれませんが、ただし、そういった展示内容の分かりやすさ、説明の技法、一枚のパネルや展示ブースの中味を深化させることは、機会を改めて、みっちり一枚のパネルの完成度をたかめるための特化した講座や互いの批評会を設けたほうが良いかと思いました。

ワークショップを終えて、こういった機会の重要性、そして展示ひとつをとっても、学術的な背景、展示技術、展示活用と運用・管理といったように検討すべき課題が多いことを再認識させられました。だからこそ、博物館ネットワークによる情報と経験の共有を進めることが重要であり、日頃から訓練を続けることが必要なのでしょう。

(1) 概要およびプログラム

日 時:2009年 12月21日(月) 午後1時30分～午後6時

会 場: 橿原文化会館、及び、橿原市昆虫館 (奈良県橿原市)

○橿原文化会館 第二会議室 (Tel0744-23-2771/近鉄大和八木駅北側徒歩2分)

○橿原市昆虫館 (休館中/Tel0744-24-7246/橿原市南山町 624)

参加費:無 料

主 催:NPO 西日本自然史系博物館ネットワーク、橿原市昆虫館

協 力:(株)ムラヤマ

趣 旨:橿原市昆虫館は平成元年 10 月に開館、今年 20 周年を迎え、初の大規模リニューアルを実施することとなりました。橿原のような地方の小さな博物館で日常業務に就いていると、学術的にも展示技術面でも体験が限られがちです。しかし、展示制作では新しい知見や正しい情報を取り入れ、広い視野から『橿原市昆虫館らしさ』を表現することも重要です。そこで今回、私たちが「俎板の上の鯉」になり、展示リニューアルに関するワークショップを開催することにしました。参加者の皆さんから忌憚の無いご意見を頂き、各博物館での事例等からお互いに学びたいと思います。そして、博物館の提供する展示の質を高め、展示に関する博物館相互の新しい連携についても方策を探れればと考えます。

●スケジュール

日 程:2009年 12月21日(月) 午後1時30分～6時頃

13:15 受付開始

13:30 開会・進行 (兵庫県立人と自然の博物館 三橋弘宗)

挨拶&趣旨説明 (大阪市立自然史博物館 波戸岡清峰)

13:45 話題提供①

「橿原市昆虫館リニューアルの概要説明」(橿原市昆虫館長補佐 木村史明)

14:00 話題提供②

「橿原市昆虫館展示リニューアル工事技術提案」

(株)ムラヤマ大阪支店エグゼクティブプロデューサー 田岡清志)

14:30 バスに乗車し、橿原市昆虫館へ移動

15:00 橿原市昆虫館到着 ～ 現地見学

16:00 バスに乗車し、橿原文化会館へ移動

16:30 コメントと質疑応答、ディスカッション

コメンテーター① 倉敷市自然史博物館 狩山俊悟

コメンテーター② 大阪市立自然史博物館 佐久間大輔

17:30 まとめ

閉会挨拶(橿原市昆虫館長 西川明秀)

(2) ワークショップでの質疑応答のとりまとめ

【全体的に】

- ・ 博物館の中の図書閲覧スペースはどう検討されているのか？ 図書は、展示のまとめや不足部分を補うための参考資料といった意味の持たせ方ができるのではないか？ また、子どもの休息スペースの取り方はリニューアルでどう位置づけるのか？
(事務局) そのアイディアは増築棟で考えているほか、第二展示スペース内に小さなベンチを置いている。
- ・ 低学年といった一般的イメージでは、「虫の好きな子ども」には不満足にならないか、そこを満足させる仕掛けは？
(事務局) 増築棟体験コーナーにおいてスタッフの対応を基本とする。
子ども向けと大人向けの部分を一枚のパネルに組み込んでいます。こども向けの簡単な解説部分は、専用のアイコンをつけたり、色を変えたりしてパネル内の区分を工夫し、高度な説明部分も盛り込んでいます。
(会場から) 休憩とリファレンスは重視している。休憩コーナーの役割は、頭の切り替え・体の切り替えとなる。
滞在時間が長いと休憩時間はより必要になる。親や同行する上でも重要なスペースになる。
- ・ リニューアルの経緯は？
(事務局) リニューアルの経緯・・・平成10年当時にも見積もり 7-8億:財政調整不調、15年に博物館登録、18年に市議会で必要性議論、19年に基本構想、構想規模に合わせて絞り込み。市長交代。20年に内容を職員で検討、まちづくり交付金で増築棟施工多目的広場などの見込みがつく展示に関しても市長判断でリニューアル 総事業費で3億弱、うち展示は約7000万あまり。
学芸員の普段のアウトリーチ活動が大ききな力になった
- ・ シニア世代への配慮も必要。休憩スペース、パネル類の文字なども。研究室が増築棟へ移ることで展示室から離れないか？ 来館者との対応のしなやかさをどうするか？
(事務局) 休憩スペースについては再考する。スタッフの配置などを検討して運用を考える。
⇒ (昆虫館) パネルの文字サイズや色を再検討し、読みやすいパネル作りを思案中。
- ・ コンセプトを作るときに利用者(たとえば学校など)の意見を聞いたか？ 子どもがどういう会話をしているかなど入館者調査はしたのか？ アンケートはどういうものをしたのか？
(事務局) 何度もアンケートやヒアリングは実施している。今年の夏場の期間にもアンケートを実施。件数は800件くらい(過去にも多数実施)。興味深かった展示などを聞いて結果を取りまとめている。また、コンセプトの形成には学芸員の日常の対応の中からの意見の吸い上げが反映している。
- ・ アンケートの要望から加わったのはどれ？
(事務局) 増築棟で考えている飼育実演&ふれあい体験カウンターや図書コーナー等の機能をあわせもったリファレンススペースを設置。ここで職員が質問対応する予定。

【各コーナー別に】

●導入部分・生き物タイムトンネルに関して

- ・ 入り口がもともと狭いところに映像を組み込むことで、渋滞がおこり団体の入館に支障は懸念されないか？
(事務局) あまり考えていない。入るのを怖がる子を引き込むことに主眼を置いている
映像は十分に短いので大丈夫かと。(映像は約 10 秒程度)
その先のゲートでも誘引するよう配慮しているのであまり心配はしていない
- (会場から) 昆虫は怖くない、親しく楽しめるものというメッセージをうまく伝えられないか？
- (会場から) 自分の館では、国立公園のビジターセンターのような位置づけ館なので入り口部分にそれほど工夫はない。クワガタのオブジェをつけたがあまりリアルでないので、著しい効果はなかった。
- (会場から) 導入部分には、企画展示のサイン、活動の紹介などのパネルがある。グッズも前面に置いている。
展示パネル全体についてだが、中見出しごとの英文、ルビは細やかに設定した方がいい。
生態展示、体験展示などのサインは職員が更新できるように、工夫するのが良いだろう。
ロゴマーク・シンボルキャラのようなものは考えておいたほうが良い(グッズ展開まで含め)
休憩スペースは展示とメリハリをつけたほうがいい。
- (会場から) つかみとなる部分が大切。広場は団体来館にとって非常に大切である。導入部分に「写真が取れる場所」が大切。隠れキャラのようなしなやかさ。写真を撮った来館者がブログ等にアップしてくれるので宣伝効果大。ウエルカム動物を飼育して展示するのも良い。
映像、スイッチものは渋滞を引き起こす。100人の子どもの来たら、80人がボタンを押す。短時間の間に次々とボタンを押すと機械が壊れるものになる。

●第二展示室

- ・ハンズオンのものと触ってほしくないものが混在する。対策はどうするのか？ オープンジオラマの破損は大丈夫？
 - (事務局) 正直まだ対策はできてない。
 - (会場から) スイッチ物や触れるものは絶対壊れる、すぐに直さないと「あっちこっち壊れている」というイメージが持たれる。そういうパーツは外国製のものには絶対だめ。できればホームセンターなどで買えるものに。
館内の団体さんがどういう風に動くか、それを想定した対応が必要である。来館団体を事前に把握しておいて、あまりに大勢で收拾がつかないような状況が予想されるときは、壊れそうなものを事前に撤去しておくこともある。その点で、ハンズオンものは可動式のほうが良いだろう。
 - (事務局) 今回は基本的には近隣で手に入る素材を使っている。一番遠くから入手しなくてはならない部品は京都。部品を買い貯めておくことも必要。映像出力は、DVDをやめてCFカードで映像を出すことにしている。また、入口映像はスイッチではなくセンサーとした。
⇒ (昆虫館) オープンジオラマの部分は、のぞき窓形式とセンサーを採用し、来館者が触る(めくる)のは、パウチ式(交換可能な)展示物だけに変更。
- ・盗難対策はどうする？ たとえば樹脂封入標本など。
 - (事務局) 樹脂封入標本はチェーンをつける。蝶のパウチはやむをえないと考える。パズルはポケットに入らない大きさのピースにすることで対応している。(⇒実際にはパズルは不採用になった)
- ・映像の中身を変えたいときにどうするのか？ 学芸員が自力できるようにしているのか？ コンセプト的なものとして「野外とのつながり」をどうするのか？ 博物館で完結していいのか？ 学芸員の活動をどう見せるのか？
 - (事務局) 映像は今のところ変えることを考えていないが、業者側で対応の想定。
背景の里山をどう使うかがキーポイントとなる。現在もボランティアが里山整備等の活動を進めている。学芸員の活動は増築棟の中で見せることを検討。
 - (会場から) 活動をどう見せるのが大切。例えば GBIF 情報発信など樫原は国内トップクラスなのでアピールすべき
 - (会場から) 映像はインタラクティブにしているため変えづらい部分もある。展示の局所局所にフォトフレームなどを使うことを考えると、いいかもしれない。そのためにはサービスコンセントなどの配慮が必要。
 - (会場から) 映像コンテンツで Director や FLASH 等のソフトを使っている場合には、納品時に素材だけでなくきちんとソースコードも受け取っておかないと改訂できない。特記仕様書のなかで明記しておくのが良い。
- ・展示を使うことを考えるといろんな可能性があると感じた。五感を使った展示。フェロモンのおいを嗅ぐので終わるのでなく、そこからもう一步踏み込む。ただ、臭いを嗅ぐだけでなく、その臭いをキーとして実際にメスを探す体験を取り入れる、音を聞かせて何かを探すなどの目的と学習到達点を明確にしたほうが良い。
 - (事務局) 検討したい
- ・なぜ洋蜂なのか？ 日本蜂を展示すべき。触る、耳を当てる、で蜂の巣の温度や羽音を感じることができる。
 - (事務局) ニホンミツバチも飼育している。展示もしたことがある。しかし入手はセイヨウミツバチのほうがしやすい。
⇒ (昆虫館) 本館と新館双方に、ミツバチなど屋外と出入り可能な巣箱の設置 & 展示箇所を設けたので、展示目的や展示種・手法について、再検討中。
- ・温室とリンクした展示は？ 体験型を全部こなすと時間がかかりすぎるのでは？
 - (事務局) 館内見学時間は約40分から小一時間の想定。遠足では全員が全部の展示は体験できないことも想定内。温室の蝶などに関しては関連展示がある。えさ植物(石垣で栽培)などの情報も出せるようにしたい。
⇒ (昆虫館) 温室を見学後に通る二階展示室にて、八重山の自然をテーマにした常設展示の制作を決定。温室のチョウや植物のみならず、石垣島園場等についても紹介予定。
- ・友の会の活動の中で困るのは研修スペース。また印刷物を作ることなどにもこまる。遠足などに配布物を作るなどにはそうした設備も大事。輪転機や大型プリンタも自前での情報発信には欠かせないので、配置が必要ではないか？
 - (事務局) 検討したい
⇒ 友の会・ボランティア・NPOの活動及び成果発表場所や方法等について再検討中。

- ・ 生物多様性はどう発信するか？

(事務局) 「地球は虫の惑星」というところを強調。

- ・ 自分たちでつくるものを配置できるスペースを見越しておいた方がいい。伊丹市昆虫館のナナフシの卵のぬいぐるみなど、ハンズオンものは手作りでやったほうがいい。使い続けようと思わず、3ヶ月でだめになってもいい、入れ替わり立ち代りで維持できる、という発想も必要。あと、来館者調査報告書などもあるので参考にしてほしい(→寄贈)。**[実際に、ダンゴムシのぬいぐるみ持参してハンズオン展示のヒントを提示]**

(事務局) 検討したい

⇒ (昆虫館) WS終了後、検討を重ね、第二展示室の常設展示の中にも、後に学芸員が作り足したり、入れ替えできる部分や造作を増やし、サービスコンセント等の設置も決定。

【コメント】

■ 狩山俊悟（倉敷市立自然史博物館）

倉敷市立自然史博物館は1983年開館、26年目。2002年より4年間かけて、約8000万円にて展示更新を実施した。

- ・ 予算獲得は同様に困難な時代が長く続いたが、市長の見学が契機になった。
- ・ 昆虫館と比べると野外スペースや建物の制約、生態展示、食事スペースなどうらやましい点がある。特に団体がお昼ご飯を食べるスペースに苦慮しているので、玄関スペースの活用は重要だと感じた。
- ・ 倉敷市博では、展示の対象エリアは高梁川流域だったが、展示更新を機会として岡山全域に拡大した。
- ・ 子どもの目線など共通するコンセプトも多い。これまでは基調色を一色としていたが、展示更新を機会として展示室ごとに配色を変えてテーマの違いを明瞭にした。利用する展示ケースは、ほとんど変えなかった。
- ・ 照明にLEDを導入した部分があるが、長持ちするはずなのに、館内の電圧変動などが原因で切れたケースもあった。
- ・ 植物の展示はこれまで蓄積してきた標本などを活用した。
- ・ 展示のメンテナンスは「自前主義」を重視し、キャプションのフォーマットだけは業者で調整、後は自分たちでやっていけるようにしている。大変だけど小回りが利く。
- ・ 世代を超えるための工夫としての「昭和」をイメージできる空間に配慮している。懐かしさを演出するようにした。
- ・ 靴を脱いで遊べる空間として畳を敷いて、おもちゃなどを置いたところ、滞在時間が飛躍的に伸びた。
- ・ 今回の展示更新でオープン展示を導入するのはいいが、破損・ホコリ・盗難などの危険について注意が必要
- ・ 今回の更新のなかで五感に訴えるとなっているが、五感の残りひとつ、味覚はどうするのか。これはイベントで対応？
- ・ 経験からすると、オープン直前にならないと仕上がらない。列品の時間を十分に計算に入れて進めるべき。
- ・ 学芸員は必ずしも「展示のプロ」ではない。業者・職人さんは、こちらが難しいと思っていたことでも簡単に解決するノウハウを持っていたりするのでよく相談したほうがいい。よいアイデアを具体化するためのコミュニケーションが重要。
- ・ 維持経費について想定しておくことが大切。倉敷では、照明の増灯による電力増加、室内の温度上昇があった
- ・ 全体サインが最後になるので、そのサイン設置の段取りも考慮したほうがいい。

■ 佐久間大輔（大阪市立自然史博物館）

大阪市立自然史博物館は1974年開館、2007-2008年に常設展示の一部をリニューアル

（概要まとめ）

- ・ コンセプトは？ →感動・学習の場としたい
- ・ ターゲットは？ →子ども目線
- ・ 展示ごとにどんなメッセージがかくされているのか（これは学芸員の責任）
- ・ 主張したいメッセージを伝えることができるメニュー構成になっているのかを再確認すべき
- ・ その展示での表現はメッセージに合致しているのか？
- ・ 情報量がたいい場合は過多になる。必要なものに絞り、十分に減らすことを考えて欲しい。

作る前に当然やっているはずだが、作り始め、作業が動き出すとデザインや技法にはしりがちになる。

コンセプトベースでもう一度内容を固めながら進めるのが良い。

- ・ 今回の展示リニューアルは、アド・オンなのか全面改修なのかを明確にしておいた方が良い。後者だと思う。
- ・ 現状のイメージ、ユーザーの期待しているイメージは何か。つまり何を守り、何をリニューアルするのかをはっきりとプロットしておかなければ、昔からの利用者に違和感を与えることになる。
- ・ 触れること、遊べることと、メッセージが伝わることは異なる
- ・ 展示を、どう使うのか。使うのは学芸員である。

新技術を使うか、問題点のわかっている技術を使うのか。リスクに対する考え方が必要である。

- ・ 科学は、疑問とその解決である。展示をみて疑問が解決できるような仕掛けが必要なのではないか。
- ・ 理科教育の使命は「知識の提供」ではなく、その考え方、アプローチの基礎を提供すべきだ。

今回の展示案では、疑問も、解決もどちらもが表現されていない点が不満。

（参考HP） <http://blog.livedoor.jp/sakumad2003/archives/50707096.html>

後日談

<http://blog.livedoor.jp/sakumad2003/archives/50954544.html>

【WS終了後、届いた意見】 ■ 根来 尚（富山市科学館）

頂いた資料を再度見て、少々気になるところがある。「昆虫になってみようー草むらの昆虫たちー」コーナーで、トンボの複眼で辺りを見ようという展示物があるが、これは六角のレンズを多数組み合わせ、例えば 1 匹のカマキリが多数見えるといったものなのか？ もしそういう展示品なら、正しいと言えるだろうか？ トンボはそうのように見えているとは思えず、誤解を与えるのではないか？

⇒（昆虫館）誤解の無いように解説パネルの補充や分かりやすいサインの提示を検討中。

（3）参加者からの感想

● 吉見 知恵（芥川緑地資料館）

今回のワークショップは、リニューアルとまではいかないが配置換えを計画中である私たちにとって、すごくタイムリーな講座であった。過去にリニューアルを経験した館の方のお話や、作った後のメンテナンスをよく考慮するべきだ、さまざまな館や展示業者から出た経験談はとても勉強になった。また、今回のワークショップには、普段なかなか出会えないような遠くからの参加もあり貴重な出会いの場でもあり、このような機会を作ってくださった西日本自然史系博物館ネットワーク、また、まな板のコイになっていただいた樫原市昆虫館さんにとっても感謝している。またこのような機会があれば是非参加したいと思う。

さて、今回見学させていただいた本館の展示室には子どもが触って遊べる展示がたくさんできる予定ということだが、職員が自由に展示を変えていける遊びの部分が少なかったように思う。新しくできる別館に学芸員や友の会のコーナーを作るということであったが、展示室と研究部が別れてしまうようで、少しもったいない気がした。来館者が必ず入るであろう本館の方にも、学芸員や友の会会員が自分たちの研究成果や行事報告を自由に展示できるスペースがあれば、あまり博物館になじみのない来館者にも、「楽しかった」だけでなく、「昆虫館ってこんなことをしているんだ、すごいな」という気持ちを持ち帰ってもらえるのではないか。このリニューアルを契機として、昆虫のことはもちろんだが、「博物館の人」や「博物館の仕事・役割」ももっと市民に知ってもらい、よりたくさんの人に利用される博物館になってほしいと感じた。

● 平田慎一郎（きしわだ自然資料館）・河島明子（国立民族学博物館）

何より参加者の多さに驚きます。やはり多くの博物館が抱えている切実な課題でありながら、こうして意見を交換する場がほとんどなかったことが大きいのでしょう。現在のリニューアル案はよくまとまっていますが、樫原に限らず、ほぼどこのハコでも備え付け可能なもののように見え、学芸員のみさんのメッセージが見えにくい印象を受けました。地域性についてもそうですが、学芸員によるこれまでの研究成果の蓄積が見えにくく、そのために「調べて考えること」を通じて感じられる喜びや楽しさの「リアルさ」が足りないように思いました。学芸員の方たちがどれだけ展示案に意見できているのか？ 意見できているとしたら、とにかくどのような来館者を育てたいと考えているのか？ これを知りたいところです。

自然科学を扱う博物館一般にいえることですが、やはり「科学的思考力」を育てることを忘れてほしくないと思います。たとえ常設展示のグラフィックパネルであっても、少しの工夫で見ると人の「なぜ？」は引き出せるのではないのでしょうか。例えば、当日サンプル掲示してあった「アサギマダラの渡り」を紹介したパネル、小見出ししかありませんでしたが、「移動する」という現象を新聞記事的に紹介した内容だと伺えました。でも、もっと本質的な疑問は「なぜ移動するのか」では？ そして、それをテーマにした研究はすでにあって有力な仮説も出ているのですから、その内容をパネルに盛り込むことは決して難しくないとと思うのです。自然史系博物館の展示要素としては、ある現象についての仮説やその解明過程も含めて紹介することこそ必要な気がしました。

リニューアルを実現された館の状況を聞いて、「たまたま市長が...」とか「友の会に議員さんが...」等の政治的偶然の恩恵が少なからず感じられたのが気になりました。そうした「幸運」がすぐには見込めない館はひたすら財政部局に要求し続けるしかないのかと思うと、少し暗澹たる気持ちになってきます。僅かな「幸運」が巡ってきた時にそれを原動力に変え得る普段からの積み重ねが何より大事なのですが、正統に財政部局を説得するときのノウハウの共有化も進めるべきではと思います。自らを棚に上げて偉そうなことを書きましたが、これも期待が大きいからにはほかなりません。これからが本当に大変なのだと思いますが、リニューアルの先輩として、後に続くものの範となるような展示を実現させて下さい！

● 金尾 滋史（多賀町立博物館）

今回のワークショップに参加させて頂き、展示リニューアルに関する「現場の経験と知恵」を共有できたことが私にとっての一番の収穫でした。常設展示のリニューアルは、在職中に1回あるかないかの大イベントです。私はまだリニューアルを経験したことがありませんので、いざ行なうとなると未経験のまま挑むことになります。そのような中で実際のリニューアルの過程を学び、様々な博物館の状況を聞き、展示を管理しているからこそわかること、気付く視点をたくさんの方から教えて頂いたことは今後にもむけた大きな経験になりました。これらの情報を共有できたことは、それぞれの館、そして博物館スタッフにとっても非常に有益だったのではないかと思います。また、今回のワークショップで得た内容は常設展のマイナーチェンジや企画展を構成する中でも十分に活用することができるものもありましたので、その点については即実行してみたいと思います。

組板の上の鯉になることは、決して恥ずかしいことでなく、普通のリニューアルでは決して行なわれることのない、博物館スタッフから見るとリニューアル像を共有できる重要な機会になります。私の館がリニューアルする際（何十年後になるんだろう…）にもこのようなワークショップを開催し色々な意見を頂きたいですし、これからリニューアルするところにはどんどん押しかけてこのようなワークショップが開催できれば、「博物館力」も強まっていくのではないかと期待しています。

● 松田 度（大淀町教育委員会）

① 樫原という地域に根ざした自然史系博物館としての機能が物足りない。

子ども対象の展示に特化しすぎて、大和三山の自然誌を学ぼうという観光客、地元の高齢者、研究者にとっては、バランスの悪い物足りない展示かなと思いました。これは、常設展示以外でも、企画展やイベント等で補足してゆかれるご予定とは思いますが。個人的には、大和三山の伝承と畝傍山の埴取り神事（埴はカブトムシ系の甲虫の糞と聞いています）について、昆虫と人との歴史的なかわりを知る常設展示ができれば、と思っていました（千塚資料館でもそのような展示は可能なのかもしれません）。

② 新展示施設と学芸員の距離感が遠すぎる。

提示された案は、明らかに遊園地感覚で博物館を考えていると感じました。懇親会でも多くの方がそう感じておられたと聞きました。どうも、博物館の顔としての学芸員の研究成果を、常設展にどのように反映させるか、という考え方がみえない気がしました。もちろんこれも、常設展以外の工夫次第ですが、常設展以外の工夫について議論をもっとしてもよかったです。

③ 世界遺産化とのかかわりについて提案がなかった。

世界遺産化については、関係者間で賛否両論あるかと思いますが、提示案でふれられていませんでしたね。当日は県外からの参加者が多かったように思いましたので、あまりこの問題に関心が移らなかったのかもしれません。樫原市としてこの問題にどう取り組むかは行政と文系の有識者も含めて議論すべきでしょうが、市の博物館施設のリニューアルの提案にそのことがまったくふれられていなかったのは、ちょっと手ばかりかなと。

これについても、世界遺産への登録の可否が判明した時期に、企画展やイベント等でどんどん補足されてゆくものと思いますが、世界遺産化を目指しますという雰囲気作り（大和三山や奈良・吉野・熊野の自然を紹介する常設コーナー）があれば、よりグッドだと思います。

⇒（昆虫館）松田さんの提案を参考に、二階展示室の半分にて、樫原・奈良・紀伊半島といった地域の自然（昆虫）と文化をテーマに、常設展示を学芸員が手作りする予定です。

● 高島 通泰（株式会社ムラヤマ大阪支店）

私達株式会社ムラヤマは、今回初めて「NPO 西日本自然史系博物館ネットワーク」のワークショップに参加させて頂きました。「樫原市昆虫館における展示リニューアルについてのワークショップ」というテーマでしたが、私達が予想した以上の参加人数と参加された皆様の関心の高さに大変驚きました。スケジュールとして、最初に樫原文化会館にて今回の展示リニューアルの概要の説明があり、次に実際に現場を見学した点で、内容を理解して頂く意味において非常に良かったと思います。その後のディスカッション等を通して、一番印象深かったのは、展示制作業者からの視点ではなく、博物館現場の生の声が聞けたことで、非常に参考になりました。例えば、伊丹市昆虫館様等からの意見として「休憩スペースが非常に大切」と言われたことですが、現実的には展示業者は展示手法に偏りがちで、なかなか休憩スペース等のことまで踏まえて、博物館全体の運営を考えることは少ないと思われます。しかし、今回は改めてそういった声を色々聞かせて頂き、納得させられる点が沢山ありました。さらに、今回の展示リニューアルの内容に対しても大変貴重なご意見を頂き、参考にさせて頂くと同時に、反映出来るところは、今後、関係者の方々と協議の上、出来るだけ活用させて頂きたいと考えています。最後になりましたが、これからの展示制作を考える上で、今回のワークショップは大切なヒントになりました。また、このような機会がございましたら、個人的にも参加させて頂きたいと思います。どうもありがとうございました。

● 榿原市昆虫館利用者(榿原市昆虫館友の会・NPO やまと自然と虫の会会員)からの感想と提案

今回の展示リニューアルワークショップの参加後、榿原市昆虫館をよく利用している「榿原市昆虫館友の会」や「NPO やまと自然と虫の会」のメンバー3人で話し合った内容をまとめてみました。

WSに参加して、まずは博物館関係者の展示更新に対する関心の高さに感激しました。裏を返せば、どこの館も予算が限られ(減らされ)、展示作り等に苦勞していることの現れでしょうか。しかし、少ない予算の中でも、創意工夫で楽しい展示や配付資料を作っている館もあり、見習うべき点が多いとも感じました。特に、伊丹市昆虫館や三田市有馬富士学習センターが紹介された教材作りの発想はとても良く、学ぶべき点が多いと思います。今回のWSでは、展示業者の方もWS参加者の経験に基づく意見を聞いて参考になったはずです。より良い展示を作って頂くようお願い致します。

展示リニューアルに際し、榿原市昆虫館でも、もう少し客層とニーズの把握を出来ないかと思ひます。例えば、友の会会員へのアンケートなど… 今回のリニューアルにはもう遅いかもしれせんが。

今後、昆虫館ホームページでの情報提供において、リニューアル中の進捗状況のレポートも掲載して貰えないでしょうか？ また、リニューアルを機に、何か充実させられるページはないでしょうか？ 例えば、普段、榿原市昆虫館を利用しても知らなかった「GBIF への昆虫標本登録数が日本一」という点は、もっと宣伝して欲しいと思ひました。

昆虫館の場所の活用についてですが、温室からの2階屋上のスペースに屋根が付けば、色々活用できるのではないかと思ひました。

⇒ (昆虫館) 屋上部分については、リニューアル計画段階で検討を重ねたのですが、屋根を掛けるのは問題が多く不可能でした。次いで屋上緑化も検討したのですが、予算等の面から見送られています。

また、館周辺の雑木林をもっと教育活用できないでしょうか？

⇒ (昆虫館) 榿原市昆虫館周辺の雑木林については、「虫いっぱい里山づくり」をテーマに、2006年からボランティアが月二回の整備活動や年に数回のイベントを継続的に実施しています。整備前に比べ、随分雑木林も変わり、明るい楽しい森になってきましたので、今後はボランティアや昆虫館のみならず、友の会やNPO・地域住民に、ぜひ積極的に使って頂きたいと願っています。

リニューアル後、榿原市昆虫館において、展示更新を機に作ったらいいと思ひものの一つが「新しい展示解説書」です。展示全部を網羅するのは制作も販売も難しいでしょうから、分冊にして、1冊500円までに抑え、順次作る手法などが考えられます。作るであれば、まずは、温室のチョウと植物の解説書を作ったらどうでしょうか。植物(景観植物・食草・蜜源植物等に区分)、チョウ(卵→幼虫→蛹→成虫・原産地・特筆すべき内容等)を簡素で読みやすく、美しい写真を使って紹介し、温室内の詳細な平面図(地図)も入れて欲しいです。あわせて、温室内の植物の解説(パネル等)を更に充実できないでしょうか？ 一方、常設展の解説書は、展示更新後に多少時間を掛けて作る方が良い物ができそうに思ひます。色々制約があると思ひますが、館内外から編集委員を集めて皆で作って、資金を募り、印刷はNPO法人が担当するなどの工夫をすれば、経費的にもやり繰りしやすいのではないのでしょうか？

関連して、展示活用する方法として、展示を見ながら回答して学ぶワークシート(学年別や大人用などに区分、館内だけで完結せず館周辺の雑木林も含めたもの)や、展示品の一つ一つを解説したリーフレットの作成と設置(月替わりで作成)等も考えられます。

⇒ (昆虫館) 第二展示室の一角に、ワークシート等を置けるフリースペース(台)の設置が決まり、作成と活用を考えていきたいと思ひます。

リニューアル後には、新しい研修室や実習室が出来るそうですので、「紀伊半島野生動物研究会」や「鱗翅学会」のシンポジウム等も開催して欲しいです。また、期間展示としては、古今東西の昆虫本や図集などを紹介する企画展等なら協力が可能です。

⇒ (昆虫館) 今秋～冬にかけて、新しい研修室を使っての「鱗翅学会近畿支部大会」・「日本直翅類学会総会」・「紀伊半島野生動物研究会シンポジウム」等の開催に向けて調整中しています。また、二階展示室や新館スペースでの期間展示等についても企画中です。ぜひ、ご協力をお願いします。

展示ではありませんが、榿原市昆虫館にもロゴマークやマスコットキャラクター(ゆるキャラ?)が欲しいと思ひました。キャラクターの方は、テーマ(種)を「オオゴマダラ」などに絞って、公募したらどうでしょうか？ 応募作品については、採用され

なくても、どこかで展示すれば、入館者増にも繋がるでしょう。

サービス面では、来館者向けのお土産として、和柄風の昆虫図案を取り入れた GOODS の開発はどうでしょうか？ 明日香村や今井町ともコラボしやすく、広い年齢層に受けそうです。最近のミュージアムショップは、精選した商品揃えが必要で、独自開発の商品案も考えないと、売り上げは見込めないと聞いています。また人件費等の問題から、発券機か自動販売機を導入できないものでしょうか？

利用者の利便性の提案として、昆虫館の入館券を1日有効券にできませんか？ 周辺の環境(雑木林や公園)の活用を考えると、一日何回でも出入り可能なほうが利用者としてはあり難いです。ただ、チェックや日付の明記などで、館には手間かもしれません。最後になりましたが、リニューアル終了後にも、「展示更新ワークショップ」を再度開催して欲しいと思います。

(4) ワークショップ開催後のアンケート集計結果

展示リニューアルに関するワークショップ

於：橿原市昆虫館(2009/12/21)

参加者59名、アンケート回収数 32 枚

1. このWSは何で知りましたか？

- ・ 西日本自然史系博物館ネットワークのML 8 件
- ・ 橿原市昆虫館(日比さん)からの案内メール 7 件
- ・ 知人からの紹介 4 件
- ・ 「全国昆虫施設連絡協議会」のML 3 件
- ・ 大阪市立自然史博ML 3 件
- ・ ML配信にて 3 件
- ・ 知人がMLを転送してくれた 3 件
- ・ 鳴く虫巡回展メールで日比さんから直接 1 件

2. 本日の感想(参考になった点)

- ・ 最近の自然史系博物館の現状を知ることができた。
- ・ リニューアルを通じて学芸員さん(我々も含めて)もさまざまなことを学んでいくのだと感じた。
- ・ 展示のメンテナンスの話、特に技術的な問題。
- ・ 観客の滞留時間の話。
- ・ 施設リニューアルを行うために必要な行政からのアプローチについて。
- ・ このような展示を対象としたワークショップは珍しく、たいへんよい企画だと思う。博物館等における研修の必要性が指摘されているが、各地域で今回のようなワークショップが開催されると良いのではないだろうか。
- ・ 普段とは違う分野の方と意見交換ができて、新鮮だった。
- ・ 過去に博物館を訪れたことのある経験者層とまだ博物館にきたことのない未経験者層をイメージしての博物館づくり(展示づくり)の大切さを痛感した。
- ・ さまざまなコメントや意見が参考になった。
- ・ 最後の佐久間氏のやや辛口のまとめが良かった。
- ・ 当館も展示リニューアルを検討しており、虫と人間の体の作りを比較した鏡などの展示そのものだけでなく、休憩場、文字の大きさ、文字の書き方など参考になった。
- ・ 色々な博物館・施設での現場の工夫について聞くことができてよかった。
- ・ さまざまな館の人と交流する機会となり、いろいろな感性や工夫について意見交換することができた。橿原昆虫館のリニューアルの経緯と各館の活動を聞くことができた。
- ・ 大変参考になりました。完成が楽しみです。
- ・ 展示のコンセプトについて何をどう考えたのか？誰(客、学芸員)にどう使われたいのか？展示からだれが何をえられるのか？等についてもう少し内容を深めることができたらかよかった。
- ・ 体験展示の手法がいろいろと参考になった。

- ・ さまざまな館の取り組みが判った。
- ・ たくさんあって書き切れません。
- ・ どの館でも類似の悩みを抱えているのだなど思った。
- ・ ワークショップ後の懇談会でさらにいろいろ話しあいたいと思います。
- ・ 「人の粗は良く見える」というのを実感したWSだった。
- ・ まな板のコイになっていただきありがとうございます。
- ・ 他館のリニューアル時の問題点を聞くことができてたいへん参考になった。
- ・ 展示リニューアルにかかる具体的な経費は参考になった。
- ・ リニューアルが予算化されるまでには、長年にわたっての予算要求等、なかなか表に出ることのない苦労話が参考になった。
- ・ 新しい展示素材を知ることができた。
- ・ リニューアル・展示換えの現場をまさに「まないたのコイ」で見せていただいた上に各方面からの意見もきけて勉強になりました。
- ・ 現在と今後の両方を説明してもらったので、何をどう考えているのかがよくわかった。バックヤードの工夫についても参考になった。
- ・ 後半の意見交換会は、実際にすぐに使える意見を多く聞けた。例えば、故障時に部品を取り寄せることが難しい外国製品はできるだけ使わないなど。
- ・ リニューアルという博物館にとって一大イベントは勤務中に1回あるかどうかだろう。他館の状況を見ることができたのは貴重な体験だった。常設展だけではなく、企画展を考える際の参考にもなりました。
- ・ 構想をいろいろとイメージすることができ、リニューアル後にどのような展示になるのか楽しみがふくらみました。
- ・ 展示を盛りだくさんにしても、博物館側の意図として本当は何を知ってもらいたいのか？何を見せたいのか？ということが大事であるという指摘は参考になった。
- ・ 子供には、素朴になぜ？という疑問を持ってもらうことも大事であるが、意外にそれができている展示は少ないという指摘も参考になった。
- ・ 展示リニューアルのコンセプトを展示にどのように生かすのか、難しい課題ではあるが、色々な新しい工夫がなされており展示技術の進歩を感じた。例えば、鳴く虫の声の聞かせ方とか、くらがりで昆虫の見せ方など。
- ・ リニューアルおもしろかったです。
- ・ いろんな人の意見が参考になりました。

3. 本日のご感想（課題だと考えられる点や改善が必要な点）

- ・ 世界遺産化を目指す樞原市の博物館施設として、大和三山の自然や歴史との関わり、文化史についての展示も欲しい(工夫して下さい)。
- ・ 本物(実際の昆虫)をじっくり見る工夫も、従来の展示とバランスをとって欲しい。
- ・ 意見の取りまとめはいつも時間がたりないので、議論する時間を十分にとって欲しい。
- ・ 内容盛りだくさんでかつ場所移動があり、少々あわただしい感じがした。リニューアル中の会場での討論は難しいとも考えられるが、できれば移動がない方がよかった。
- ・ 参加者の意見は大小さまざまなレベルでもっといろいろとあったと思われるが、出にくかったのではないだろうか。
- ・ 昆虫館の高い天井を生かした提案があってもよかった。
- ・ 来館者は記念に何か買って帰りたいことが多いので、グッズ関連を充実させたらどうだろうか？ 公の館として収益は上げないにしても、館内の諸経費に回せないか？
- ・ 自分の息子の動きを見ているとボタンもの、パソコンなどが好きでそこに長時間いることになります。パソコンなど数が増やせそうなものは、できるだけ多く設置して欲しい。展示の最後に配置されているが、エントランスにある方がよいのではないか？
- ・ 本物の標本も大事ですが、昆虫の内部などについて、図鑑のように視覚にうったえる展示が必要な気がした。
- ・ 蝶の温室は素晴らしいと思った。
- ・ 個人的に実物の虫の群れは恐ろしいイメージがあり、拡大模型などがメインになれば子供にも恐怖心は少なくなるのではないか？
- ・ 昆虫グッズのガチャポン、ムシキングなど、子どもが好きな虫関係のグッズはあっても良い気がする。
- ・ クイズはさほど必要性を感じない。
- ・ 機械類は必ず壊れるので、将来的な維持管理費用をどう考えているのか？
- ・ 多目的広場の屋根のキャパシティはどれくらいでしょう？ 団体人数が多いときは大丈夫ですか？ 雨風が強いときは、屋根だけでは厳しい。
- ・ 遊んで学べる場になれると思いますが、遊んで終わりにならないようにしないといけなく感じました。
- ・ 設備を与えるのも良いが、職員自身が感動するような方法をそのまま展示しても十分大切なことを伝えることができるのではないかと思います。
- ・ 学芸員の方々がどれくらい館運営に関心を持っているのか、が気になりました。解説パネルの穴埋めでしか関わることができていないのでは少し不安です。(すでに積極的に関わっておられるかもしれませんが・・・)
- ・ ワークショップの時期。リニューアルの方針が未決定段階の方が、より意見がでやすかったかもしれません。
- ・ 子どもに迎合した感じのタッチパネル式展示が多いのが気になった。
- ・ 各学芸員さんの研究成果がわかるような形で来館者にPRできるコーナーもあってはどうか。
- ・ 館内を明るくすると第2展示室の廊下がもっと見えてくる。
- ・ 壁が使えるので、空白がもったいない。周辺のサークルの活動内容のポスターや国内に見られる昆虫のニュース、温室のニュースを紹介してはどうか？ 完成した展示室に入れるのは適切ではないと思うので、手作り感のあるものをここに並べるのは抵抗が少ないのでは？ 期待感が高まります。こんな会を作ってくれたことに感謝。
- ・ 地域のつながりは、重要視されているのか？
- ・ 地域の自然を紹介、発信するだけでなく、地域から情報をもろうという姿勢は必要ないか。
- ・ 完成後の活用法、メンテナンス、本気で活用しようとする学芸員さんは大変になってしまうかも？
- ・ 展示の根底にあるねらいや目標を聞きながら見学したかった。
- ・ よみたい！と思える量の文字数にして欲しい。
- ・ 活発な意見が出てたいへんよかったなと思います。
- ・ 学芸員の役割が大きくなった(以前からかも知れないが)。
- ・ もっとワークショップの時間が長くてよかったように思う。
- ・ 室内展示型施設として体験(体感)するという展示は基本的には擬似体験であり、今回の展示手法として、このような形が限界なのかもしれない。昆虫・自然に興味を持たせる感動をあたえるという所まで、どれだけ近づけるのか？
- ・ 「全昆協」で矢島氏が何度か話している「室内展示は、フィールドワークの事前・後学習の場にすぎない」事を思いおこし、野外での体験や職員と利用者との直接のコミュニケーションできる場を多くつくる必要を感じます。
- ・ 移動がなければ良かったと思います。
- ・ 「ハンズオン」といっても、実際手にするものは「虫そのもの」でないところが気になりました。あるいは「虫にアプローチする道具そのもの」でも。特にアクリル標本は、目をつぶって手にしても何もわからないので・・・(一見ハンズオンのだけどちがう所が問題かなと・・・)、カマキリのうごかすのもそうです。これは行事やイベントでフォローされるのといいと思います。固くて丈夫でかわれる昆虫っていますか？
- ・ 展示構想に至るまでの、流れ、コンセプトの検討方法(プロセス)が、討論出来るとよかったと思います。
- ・ ハンズオン展示は故障がつきもので、修理可能また誰でも部品交換できるようにしておく必要があると思います。
- ・ 昆虫嫌いの子に対する配慮をとる意見があったように当館にあるすべり台(大)のミヤマクワガタ(かなり人気があります)を怖がって展示室に入れないお子さんもいらっしゃいます。あまり虫・虫していない、可愛らしいものも必要かも知れ

ません。

- ・リニューアルのコンセプトを練られた過程などをもっと聞けたらよかった。
- ・作りつけの展示が多くなるように見える。学芸員の工夫が見える展示が難しくなるのでは？体験はみんなで出来るものではなく1人1人が対象になっているので、団体には対応しにくいのでは？
- ・時間がたりない！
- ・リニューアルとは無関係かも知れませんが、展示を外した上での現場見学であったので、今一つスケッチのようなイメージがわいて来なかった。
- ・新しい技術や目新しいものに走りすぎず、昆虫館だからこそできる「本物」を来館者に伝えて欲しいです。
- ・高齢者や障害者に対する色々な配慮が必要であろうと思う。階段も多く段差もあるので展示の順路作りなどで色々改良して欲しい。
- ・パーツを日本製にした方がいいと思います。(もうすでにさされていたらすみません)
- ・センサー式の展示では団体対応は難しいと思います。

4. 今後、ご希望される講座やWSがあればお書きください

- ・自然と人にかかわる楽しいワークショップをまっています(一般向け、研究者向け)。
- ・新しい昆虫達の中で講座・ワークショップができるのはうれしいです。講座やワークショップで、新しい研究・調達成果を教えて欲しい。
- ・展示について、観察会について、普及に関するテクニカルな話題「友の会」。
- ・見やすいパネルの作り方(デザイン、文字サイズ、フォント、など含む)。
- ・手作り展示で使える道具、材料、技術、考え方。
- ・博物館めぐりツアー。
- ・展示コンセプト、ねらいの設定方法とそれを達成するための方法。
- ・テーマをしぼって情報を集めた上で議論しては？
- ・パネル作成のノウハウ(大判プリンタ講座とからめて)。
- ・照明講座の応用編。
- ・予算の組み方講座。
- ・施設管理のノウハウ。
- ・展示説明の技術についてのワークショップ。
- ・「学芸員による手づくり展示」の技術についてのWS。
- ・展示づくりワークショップ。
- ・ぬいぐるみワークショップ。
- ・封入標本の製作方法。
- ・おもしろく話が出来るためのワークショップ。

- ・実際に昆虫館がオープンした後に再度ワークショップがあれば嬉しいです。
- ・展示関連のワークショップは、もっとあるといい。

5. その他なんでもどうぞ！

- ・ありがとうございました。
- ・このような会がないとなかなか皆の顔が見られないのでたいへんありがたい企画です。
- ・西日本はいいですね。東でもこういったまとまりができるいいのですが…。
- ・とても楽しかったです！ありがとうございました。
- ・やっぱり暗いイメージがあります。職員の方の活動・気持ちを感じられる明るい博物館をぜひ目指して下さい！ありがとうございました。
- ・今日は本当にご苦労さまでした。
- ・とても貴重な研修会をありがとうございました。
- ・遠方からの参加者が多く驚きました。
- ・半日ではもったいなさすぎます。
- ・ありがとうございました
- ・人材が必要！
- ・勉強になりました！次回はもっと大きい会場でマイクつきでよろしくおねがいします。
- ・学芸員さん達が積極的に展示に加わり続けていって欲しいと思います。
- ・昆虫達のすばらしい世界を子ども達に伝え続けて下さい。
- ・できかけの時(作業中)も見たいです。
- ・勉強になりました。ありがとうございました。
- ・博物館の関係者ではありませんが、このような有意義な情報を教えて頂いて感謝しております。私としては今後、展示のコンセプト等を出来る限り理解した上で、展示を拝見できればと願っております。
- ・このような館同士でコミュニケーションがとれる機会を時々作って欲しい。
- ・おもしろい機会をありがとうございました。

(5) まとめにかえて

橿原市昆虫館におけるリニューアル工事にあたり、2009年12月21日(月)午後、橿原文化会館、並びに橿原市昆虫館にて、「展示リニューアルに関するワークショップ」を開催しました。当日は、橿原市昆虫館展示リニューアルの概要を説明後、昆虫館展示室ではサンプル等を用い、昆虫館全体を見学し、その後、最近展示リニューアルを実施した館からコメントを貰いつつ、実践的かつ具体的な議論展開を心がけました。

ワークショップには、全国から59名もの参加があり、議論された内容は今後の展示更新を考える上で、NPO西日本自然史系博物館ネットワークをはじめとする多くの博物館等について貴重な資料になると考えました。そこで、当日の議論やアンケート結果、コメント等を含め、整理し掲載させて頂きました。

今回のような実施途中での実例を用いた展示改修のワークショップは過去に例が無いようですが、この提案をいただいた時は、我々も内恥をさらすようで、おおいに戸惑いがありました。この度のリニューアルは、当初、まず、雨天時の団体の食事スペースなど現在不足している機能を増築などによって補い、次の段階として既存展示の改修を行う計画となっていたのですが、急遽展示改修も一括して行うことになったものです。そのため、展示の内容や手法等についての検討時間の不足は否めず、また、業者とのやりとり等の経験も不足している我々にとって、今回のワークショップはたいへん意義深いものとなりました。当館は当初から自然科学への導入、興味付けに重点を置いた展示を目指してきましたが、これまでの展示はオーソドックスな解説が中心で、参加型・体験型の展示がほとんどありませんでした。そのため、今回のリニューアルでは、それらの展示に少し偏重しすぎた傾向があるかもしれません。表面的な紹介に流れている、カマキリの前脚の動きやトンボの複眼等の体験展示も、あくまでも興味付けの観点からの導入で、実際との相違点は解説等で補う予定にしています。

橿原市は、人口にして10数万人の小さな街です。この小さな街に、奈良県で唯一の自然史系博物館があること自体不自然だと失笑する人は決して少なくありません。しかし、橿原市はこれからの市の姿を第3次総合計画で、「受け継がれてきた豊かな自然・歴史・文化をまちづくりに生かし、国内外の多くの人々、情報、文化が交流する、活力と魅力にあふれた都市を目指します。」と提示しています。多くの歴史的遺跡や史跡は、私たちの祖先がこの地で営みを続けてきた証であり、後世に伝えていかなければなりません。そして、歴史的遺跡・史跡や私たちの生活を大きく抱擁してくれているのが豊かな自然環境だと思います。

橿原市昆虫館の使命は、この街の人々の生活と自然環境のより良いあり方を提示することだと考えます。多くの生き物の姿をとおして、命の大切さや自然の素晴らしさを実感してもらい、自然環境に囲まれた都市空間の創造に取り組みたいと考えています。今回のワークショップで頂いた、たくさんの意見を参考にし、橿原市昆虫館なりのスタイルを築いていきたいと思っています。

最後になりましたが、ご協力いただきました多くの皆様に心から感謝いたします。

橿原市昆虫館 館長 西川明秀
館長補佐 木村史明

担当連絡先

橿原市昆虫館 日比伸子 insect@city.kashihara.nara.jp

兵庫県立人と自然の博物館 三橋弘宗 hiromune@hitohaku.jp

●ワークショップの様子



会場は大入りで、限界ギリギリの人数です



展示更新内容についてプレゼンテーション



プレゼンテーションする木村学芸員



プレゼンテーションする株式会社ムラヤマの田岡氏



リニューアル展示の概要をプレゼンテーション。展示室のリニューアルイメージのパース図を示して説明



リニューアル展示の概要をプレゼンテーション。展示のコンセプトをフロー図で説明

写真つづき



橿原市昆虫館の展示改装現場を参加者が訪れる



リニューアル展示の概要などをムラヤマの方が説明



討論の様子。展示を担当している木村学芸員が丁寧に会場からの質問に回答



討論にて、倉敷でのリニューアル事例を分かりやすく具体的にコメントして頂いた狩山氏



討論では、全体的なまとめも兼ねて情報整理と課題について上手くコメント頂いた佐久間氏



有馬富士自然学習センターで活躍しているダンゴムシのぬいぐるみ。手作り展示が重要であるとの意見があった。

● 参加者名簿

氏名	所属	氏名	所属
田口 圭介	芥川緑地資料館	多胡 亮	堺自然ふれあいの森
高田 みちよ	芥川緑地資料館	矢野 真志	面河山岳博物館(愛媛)
吉見 知恵	芥川緑地資料館	河合 正人	日本直翅類学会
山中 みのり	芥川緑地資料館	日比 伸子	橿原市昆虫館
藤井 智子	多摩動物公園昆虫園	伊藤 ふくお	NPOやまと自然と虫の会
松田 度	大淀町(奈良)教育委員会学芸員	日裏 康夫	橿原市役所 営繕課
平田 慎一郎	きしわだ自然資料館	丸山 時子	橿原市役所 営繕課
富沢 章	石川ふれあい昆虫館	木村 史明	橿原市昆虫館
河島 明子	国立民族博物館	西川 明秀	橿原市昆虫館
北村 美香	滋賀県立琵琶湖博物館	辻本 始	橿原市昆虫館
辻村 朋子	東近江市能登川博物館	丸山 健一郎	橿原市昆虫館友の会
中峰 空	三田市有馬富士自然学習センター	前田 一郎	造形作家(紙)
中峰 早織	三田市有馬富士自然学習センター	坂本 昇	伊丹市昆虫館
原田 桂太	京都大学瀬戸臨海実験所	宮武 頼夫	橿原市昆虫館友の会
小川 隆之	三重県生活・文化部新博物館整備推進室	木村 全邦	川上村・森と水の源流館
今村 隆一	三重県立博物館	金尾 滋史	多賀町立博物館
西澤 正隆	長崎たびら昆虫自然園	西澤 真樹子	芥川緑地資料館
河野 甲	造形作家(皮革)	波戸岡 清峰	大阪市立自然史博物館
樋口 高志	(株)環境総合テクノス	佐久間 大輔	大阪市立自然史博物館
加納 康嗣	日本直翅類学会	北村 俊平	兵庫県立人と自然の博物館
井上 奈緒子	(独)日本万国博覧会記念機構事業部	狩山 俊悟	倉敷市立自然史博物館
井上 雅仁	島根県立三瓶自然館	三橋 弘宗	兵庫県立人と自然の博物館
西口 栄輔	(有)アイエフプロ	田岡 清志	(株)ムラヤマ大阪支店エグゼクティブプロデューサー
岡本 明久	(株)自然教育研究センター	亀山 吟次郎	(株)ムラヤマ大阪支店クリエイティブデザイン部長
金杉 隆雄	群馬県立ぐんま昆虫の森企画普及係	北村 裕史	(株)ムラヤマ大阪支店CC/PD営業部・部長
根来 尚	富山市科学館	玉川 光男	(株)ムラヤマ大阪支店CC/PD営業部・課長
中尾 博行	水のめぐみ館アクア琵琶学芸員	高島 通泰	(株)ムラヤマ大阪支店CC/PD営業部・係長
江間 瑞恵	図書館司書	今西 寛	(株)ムラヤマ大阪支店制作購買部・課長
田中 之博	造形作家	徳島 友華	(株)ムラヤマ大阪支店クリエイティブデザイン部
高橋 元明	造形制作関係者		

[順不同・敬称略]